枕草子「をかし」の世界

―「あはれ」を拒否する美意識の成立―

三十六回卒　田中倫子

序

『枕草子』が「をかし」の文学であるということは現在定説となっている。作品全体は明るい「をかし」で貫かれているのである。しかし実際には、その背景は決して明るい華やかな出来事ばかりではなく、清少納言（以下清女と略す）や定子にとっては、むしろ、暗く不幸な事の方が多かったと言えるであろう。清女が定子に仕え、『枕草子』に描いた約八年間のうち、中宮定子サロンが物質両面にわたり、本当に光り輝き、幸福に溢れていたのは最初の約2年間だけであった。道隆の死を境に、中関白家は衰退の一途を辿るのであって、定子もまた大きな打撃を受けて次第に苦しい立場に追いつめられ、ついには二十五歳の若さで崩じることとなる。

ここでは、清女は何故、主家と定子の悲運に触れることなく明るい「をかし」の世界を描いたのか、また、それが何故「をかし」という語でなければならなかったのか、といういわば美意識「をかし」の成立理由について論を進めていきたいと思う。

同時代の他の作品を見ると、『源氏物語』をはじめとして「あはれ」を多用しているものが多く、このことからも当時の人々の好みに「をかし」よりも「あはれ」が合っていたであろうことは想像に難くない。それにもかかわらず『枕草子』では「をかし」の数が「あはれ」を上回っている。[注1]『枕草子』、中でも類聚的章段は特に、歌枕や古歌・物語を踏まえたものなど、宮廷貴族や女房たち全般の好尚が取り入れられている。内容に時代の好尚を盛り込みながら、その根本となる基準を「あはれ」でなく「をかし」としたのは、逆に時代の好尚に反していると言えるのではないだろうか。それは清女が、時代の好尚を察知できなかったとか、「あはれ」を感じなかったというわけでは決してなく、ある意図をもって「あはれ」を拒否したとしか考えられない。

その意図とは何か。先に結論を言ってしまえば、それは

恐らく、中関白家とともに衰退していく中宮定子サロンを明るく保ち続けるため、また定子を永遠の理想像として『枕草子』の中に描き出すためであったろう。中関白家、特に定子は、清女にとって絶対的な存在であった。「宮にはじめてまゐりたるころ（179）」初めて見る中宮に対し、「限りなくめでたし」、「かかる人こそは世におはしましけれ」と驚嘆しており、「素質的に磨かれざる玉であった」[注2]清女は、この輝かんばかりの中宮定子サロンに出仕し、中宮の寵愛を受けてはじめて「その才華を発揮する」[注2]のである。清女にとって、中宮定子サロンとそれをとり巻く社会は理想世界そのものであり、中宮定子その人は、まさしく、清女の追い求める理想像であった。そのような定子の悲運を清女は認めたくなかったであろうし、道長方や他の宮廷貴族たちに定子サロンの衰退していく姿を決して見せまいという強い意地もあったかもしれない。中関白家の没落を目のあたりにして、寂しく心細くなりがちな定子サロンで、以前と変わりない華やかさ（物質面ではなく精神面）や洒落た雰囲気を政治とは無関係に保ち続けることが、定子の心を慰めることになるのであり、また、逆境にも動じない中宮定子サロンを他の宮廷貴族たちに印象づけることにもなるわけである。

このように清女は定子サロンを明るく華やかにしておくために、事物を「をかし」と見笑いを振りまくのである。ここで、哀感をそそる「あはれ」が避けられたのは当然のことと言えるのではないだろうか。「あはれ」という語は没入的、継続的、主観的で「対象と一如となる境地の美であり、〈感じる心〉の表現」[注1]である。心の底からのしみじみとした感じを表わすために「悲哀」の意を少なからず含んでいる。悲哀感に陥ることは清女が最も避けたことであり、また、継続的であれば中関白家の没落を避けて通るわけにはいかないのである。

これに対して「をかし」は、「対象を客観的・理知的に興味深く観察」し賞美する語が根本となるため、「明るくはなやかな情趣や滑稽な笑いの意に広がる傾向をもつ」[注3]ものである。客観的、理知的であれば物理を冷静に見ることができ、決して感情に溺れることはない。明朗さや滑稽味は全てを明るく包み込む。また、「〈眺める心〉の所産」[注1]であり、「空間的」「即物的」「視覚的」「断片的」[注1]に事物を「賞美」する語であるので、その瞬間、その場のみが問題となるのだ。果てるともなく流れる時間の中で、光彩を放つある一瞬、一場面を切り取り、絵に描くごとく『枕草子』に描きとっていったのである。このことについて目加田さくを氏は[注4]

有為転変の人の世に、たまたま訪れる一点の影もない光、滔々と流れる濁流の中にも、一ヶ所、一時、清く澄んだヶ所がありうる、それを宝のように大切にとりあげ形成したのが、清少納言枕草子、をかしの文芸なのである。

と言われる。また、三田村雅子氏によると『枕草子』は[注5]

時間の経過を無視し、その場面を裁断することで辛う

じて成り立つった華々しさを印象深く描き出すことに賭けている作品

であるという。場面の描写がその時限りという点で「清少納言」は『点』の作家」[注6]であり、『枕草子』はそれぞれ独立した「点」の集大成である。

彼女は「点」を「線」にしなかった。〈中略〉いや、「しなかった」のではなく、彼女には、それが「できなかった」のかもしれない。清少納言は、ある時点において、そのこと、そのものをとらえ、それを明るく見て、そのことを賛えた。[注6]

まるで絵や写真のように、場面場面を生き生きと描いているが、それが一つの流れや繋がりを持つことはないのである。

「瞬時性」についてもう少し言うならば、これは清女が最も良しとしたものの一つである。「香爐峯の雪、いかならむ」との中宮のことばに、時間を置かず御簾を上げて答えた話（284）や、「この君にこそ」と呉竹の名を言い返した話（132）は有名であるが、これらは即座にというところに意味が存するのである。漢詩や古歌を踏まえたり、他人の歌を借用したりすることがすばらしいとされることなのだが、それも時間がかかっては価値が半減する。

瞬時性が好まれるということは逆に、命長らえるものは好ましくないということである。六月になれば姿を消してしまう郭公は「すべて言ふもおろかなり」と絶賛しているが、一方、鶯に対しては、

夏、秋の末まで、老い声に鳴きて、虫食ひなど、ようもあらぬ者は名をつけかへて言ふぞ、くちをしくくすしきここちする。〈中略〉なほ春のうち鳴かましかば、いかにをかしからまし。（38）

としている。春の間だけは「をかし」く「めでたし」と思われるが、それだけに余計夏や秋には嫌われるのである。薄にしても同じだ。

秋の野のおしなべたるをかしさは、薄こそあれ。〈中略〉秋の果てぞ、いと見所なき。色々に乱れ咲きたりし花の、かたもなく散りたるに、冬の末まで頭の白くおほどれたるも知らず、昔思ひいで顔に風になびきてかひろぎ立てる。人にこそいみじう似たれ。よそふる心ありて、それをしもこそ、あはれと思ふべけれ。（64）

盛りの頃は何にも増してすばらしいが、一旦時期を過ぎると見る甲斐もなくなってしまう。どれも一瞬の輝きを大切にしているのであり、その後の醜さは惨さを添えるだけで、潔く消え去るのがよいのである。こう考えるとこの潔い姿は中宮定子に繋ってくる。帝の寵愛を一身に集めながら、まだ二十五歳という若さでこの世を去るのである。「頭の白くおほどれたるも知らず、昔思ひいで顔に風になびきてかひろぎ立てる」冬の薄とは違って、瞬間の命ではあったが、その一生は燦然と光り輝き、その美しさを周囲の人々の目にとどめたのである。「げに、千年もあらまほしき御有様なるや（20）」とあるように、清女は消して定子の短命

を望んだわけではない。短命だった結果としてより一層美しさと輝きを増し、清女の中で永遠の理想像として蘇るのである。ここで清女は、薄の姿に人の一生を重ねて見ているが、傍線部のように、人は誰しも歳をとって醜くなっていくものである。盛時を追懐して物思いに沈む。これはまさしく「あはれ」の境地である。「よそふる心ありて、それをしもこそ、あはれと思ふべけれ」といかにも客観的に、第三者の立場で書いてはいるが「あはれと思」ったのは他ならぬ清女ではなかったか。自分でなく、他の人が「あはれ」と感じるだろう、と書くことによって自分の「あはれ」の感情を覆い隠そうとしているのではないだろうか。

花山天皇の外戚として当時最も権勢があり、小白河殿の八講で「常よりもまさりておはするぞ、限りなきや（32）」と見えた義懐の中納言が、そのわずか二十日ばかり後には、政変のため出家したのを、清女は、

あはれなりしか。桜など散りぬるも、なほ世の常なりや。「置くを待つ間の」とだに言ふべくもあらぬ御有様にこそ見えたまひしか。（32）

と、「痛惜し」、「嘆息を漏ら」[注1]している。輝きを持つものがそのまま一瞬に消滅してしまう所に美を見出し、その美を追懐し、名残りを惜しむという点で「あはれ」を感じるのである。「をかし」と「あはれ」は「同根異質の美意識」[注7]と言われるが、ここに両者の接点を見出すことができる。中宮定子には抑えに抑えた「あはれ」が、ここではストレートに表現されているが、この段は清女出仕以前の話であり、義懐は清女にとって何の関係もない遠い存在、言わば「あはれ」を感じてもよい存在なのである。遠い存在である義懐に対しては「あはれ」を感じることが許されても、定子や中関白家に対してだけは「あはれ」の感情の表出を頑なに拒否した清女の姿が、ここに浮かび上がってくる。しかしながら、この義懐の悲運に対する「あはれ」の感情には、書いてはならない中宮定子への「あはれ」がこめられているように思えてならない。義懐と定子とは、幸福の絶頂から、一転して衰退の途を辿るという点で、その運命は似通っている。書いてはならなかったからこそ、この二人の姿を重ねて、当時の人々が誰しも抱いたであろう義懐への「あはれ」に、定子に対する「あはれ」を託したのではないだろうか。そうすることにより、定子への「あはれ」の感情は陰に隠れ、読者の目には映らずに済むのである。

同時代の他の作品がそうであるように、また、現代の我々においても、日常生活の中で、四季折々、自然の移り変わりや、身近で起こる些細な出来事に対して「あはれ」を感じるものであるが、中関白家の凋落という時代の大きな渦に巻き込まれた人々にとってその心は一入であり、何かにつけて身に迫って感じられたことだろう。どんなに清女が、また他の女房や中宮定子が、書物を「をかし」く見、明るく笑おうとしても、やはり「あはれ」を抑え切れるものではなかったはずだ。では以下、このような「あはれ」の感情をどのように拒否し、その表出に抵抗したか、具体

的に見て行きたい。

職の御曹司におはしますころ、木立などの遥かにもの古り、屋のさまも高うけ遠けれど、すずろにをかしおぼゆ。（74）

この段は長徳三年六月二十三、二十四日頃のことであるとされるが、この時の中宮の職曹司滞在は、長徳三年（997）六月二十二日から長保元年（999）一月三日までという長期にわたるものであった。この間のことを増田繁夫氏は次のように述べておられる。[注8]

中宮という身分の人が内裏へ入ることもできず、こうした場所にいるというのはずい分つらいことであったと思われる。職曹司に中宮の行啓のあった前例はかなりあるが、それらはいずれも短期間の特殊な場合であり、このように長期間定住することはなかったのである。後楯を失い衰退していく過程において、内裏へ入ることも許されない定子や清女にとって「木立などの遥かにもの古り、屋のさまも高うけ遠」い様子は、「あはれ」とは感じても決して「すずろにをかしうおぼゆ」といった状況ではなかったはずである。それを清女らは敢て「をかし」と見、上達部、殿上人の前駆に「聞き騒」ぎ、庭に「出でゐ、おりなどして遊ぶ」のである。この部分が特に強調して記してあるのは、

中宮方のこの時期のみじめさを意識してのことであり、それを記すことで虚勢を示しているのだと考えられる。[注8]

このように「『枕草子』中の『をかし』という評語は、『あはれ』といいかえることも可能な場合は少なからず含んで」おり、「余人ならば、当然、『あはれ』と受容すべき事態をも」[注4]清女は「をかし」あるいは「めでたし」としている。

道隆が薨じて五ヶ月後、九月十日の供養の後、

頭中将斉信の君の、「月、秋と期して、身いづくか」といふことを、うちいだしたまへりし、はた、いみじうめでたし。（130）

とあるが、この「めでたし」も「あはれ」に置換え可能である。この段は斉信と清女のことについて主に記された段であるから、この「めでたし」も折にかなった詩を吟じた斉信に対して用いられている。しかし、これは表面的なことで、詩の意味を考えると「あはれ」を感じずにはいられないだろう。萩谷朴氏はこの句の前後を考慮に入れて、

関白道隆が存在してこそ、中関白家そして中宮のお身の上も華やかであったことが、この願文の詞句にぴったりと思い合わせられる。[注10]

と言われる。

また、次の「めでたし」も「あはれ」とすることができるであろう。

皆人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける

この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。（225）

定子のこの歌の解釈は説の分かれるところであるが（「皆

人」を定子周辺の女房たちや御匣殿ととるか、彰子方の人々ととるか）、どちらにしても彰子の立后に大きな打撃を打け、寂しい日々を送る定子の心細さ、気弱さをここには見ることができる。上達部・殿上人など大勢の人に囲まれ、帝と共に賑やかに端午の節句を祝う中宮彰子に比べ、定子皇后は、修子内親王、敦康親王という二人の御子がいるのにもかかわらず、平生昌邸で寂しく過ごさねばならなかった。「この歌の背景にはおそらく、彰子に圧されつつあり、帝も彰子の父道長にはばかるような有様であった身の悲運を嘆く嘆きが秘められている」[注2]のである。しかし、清女は敢て「めでたし」とした。

しめくくりの評語が「いとめでたし」とあって「いとあはれなり」とないのは〈中略〉女人としての皇后への同情よりも、作家としての皇后への賛嘆が先に立ったからであろう。[注11]

このように萩谷氏は述べられるが、この説には背きかねる。「作家としての皇后への賛嘆」ももちろんあっただろうが、それが「同情よりも」「先に立った」とは思えない。この「めでたし」にはかなり無理があるように思える。本段は『枕草子独特の、華やかな思い出ではなく、涙を押し隠しての悲哀・愁嘆の文章[注12]」である。これらのように、作品中の「をかし」「めでたし」のいくつかは、純粋にそのままの意味ではなく、その奥にはかり知れないほどの悲痛な「あはれ」を抱え持っているのである。

次に「あはれ」も「をかし」の一要素と位置づけて使用している箇所がある。「『あはれさ』を『をかし』と言い[注13]」うことにより、「あはれ」に傾くことを回避しているのである。

・さは、翁丸にこそはありけれ、昨夜は隠れ忍びてあるなりけりと、あはれに添へて、をかしきこと限りなし。

(6)

・柴焚く香の、いみじうあはれなるこそ、をかしけれ。(215)

・母の皇女の、「いよいよ見まく」とのたまへる、いみじうあはれにをかし。(293)

どうしても「あはれ」でなければ表現できない場合も。これらのように「をかし」と併用して「あはれ」の印象をできる限り弱めようとする、清女の「あはれ」に対する用心深さがここでは明確である。

また、「あはれなるもの(115)」という段においても、そのテーマである「あはれ」に没入してしまわずに、宣孝の話を巧みに挿入し、悲哀感を拭い去っているのである。「殿などのおはしまさで後(138)」の段では、さすがに「あはれ」を抑え切れなかったようであるが、それでも清女自身の言ではないし、例のように「ヲカシ」を併用しており、ここにも清女の意図が窺える。

「今日、宮にまゐりたりつれば、いみじう、ものこそあはれなりつれ。女房の装束、裳、唐衣、をりにあひ、たゆまでさぶらふかな。〈中略〉をかしうして居並みたりつるかな。御前の草のいと茂

きを、『などか。かき払はせてこそ』と言ひつれば、『ことさら露置かせて御覧ずとて』と、宰相の君の声にて答へつるが、をかしうもおぼえつるかな……。」

伊周、隆家の配流事件後のことで、この時中宮定子周辺はかなり惨めな状態にあったと思われるが、女房たちは時節にあった衣装で華やかに伺候し、生い茂った御前の草に「ことさら露置かせて御覧ずとて」と言うのである。女房たちの痛ましい程の心意気が感じられる所であり、このあとの「をかしうもおぼえつるかな」も「あはれ」と見るべきであろう。

ただし、「をかし」や「めでたし」で粉らすこともできず、完全に「あはれ」の境地に沈んでしまっている所が一箇所だけある。

あかねさす日に向ひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすらむと御手にて書かせたまへる、いみじうあはれなり。（226）

道長方など外からの圧力は、定子にとって大きな打撃であったことには違いないが、それでも内部の人々（定子付き女房や親しい人々）に支えられていたからこそ、表面だけでも明るく振舞い、何とか堪えてくることができたのである。定子はどんなにか内部の人々を頼りにしていたことであろう。しかしそれを振り切って御乳母までもが定子の下を去って行くのである。それは外からの圧力以上に定子の心を痛める結果となっただろう。この「あはれ」は作品中ただ一箇所、定子に対して清女が直接、悲哀の意で、しかもそれを弱めようとも隠そうともせずに使用した所である。ここでは清女も「あはれ」を払拭しようと試みることさえできないほど、心に余裕がなかったらしく、いつもの客観的な態度はすっかり失われてしまっている。これは、この時定子がどんなに悲惨な状態にあったかを物語っていると言えよう。たった一言ではあるが抑え切れず漏れ出た「あはれ」、それは他に見ることができないだけに一層強烈である。清女がこれまで懸命に構築してきた『枕草子』「をかし」の世界は、この一言のために、内包する「あはれ」を露呈し、今にも崩れそうな脆いものとなっている。

結び

中関白家の没落により中宮定子サロンは後楯を失い、大きな打撃を打けるが、定子やそこに集う女房たちは、昔と変わらぬ華やかさを保とうと健気に努力している。しかしやはり悲しみに沈みがちで、清女を始めとする女房たちは中宮定子の心を何とか引き立たせようと、一層明るく賑やかに振舞うのである。また、中関白家を没落へと追い込んだ道長や、他の後宮（特に彰子サロン）に、沈んだ様子を見せたくないという意地もあったと思われる。この二点に加えて『枕草子』では、中宮定子を永久不変の理想像として描くことを一つの目的としていたのであり、そのために「あはれ」を払拭して「をかし」の世界を構築したのである。

「をかし」は明るさと瞬時性と滑稽味とを持って、客観

的、視覚的、断片的に物事を評価、賞美する語であるから、「あはれ」を感じることなく全てを明るく観ることができるのである。清女が「あはれ」を拒否することによって構築を試みた「をかし」の世界は、一見、明るさと笑いに満ちて成功したかに見えるが、実際はその奥に多くの「あはれ」を秘めた非常に脆いものである。二二六段ではその「あはれ」が完全に露呈し、このためにあるいは、清女が目指した「をかし」の世界の構築は失敗に終わったと言わなければならないかもしれない。しかし、清女が「千年もあらまほしき（20）」と言った西暦五年（994）春から、まもなくその千年を迎えようとしている今日でも、またこの先も、清女が敬慕してやまなかった中宮定子の輝きは『枕草子』に見ることができるのであり、その意味では千年前に清女が期待していた以上の成功を収めたと言えるであろう。

注

(1) 塚原鉄雄「『あはれ』と『をかし』の感覚」（日本古典鑑賞講座『枕草子』角川書店）
(2) 石田穣二　新版『枕草子』（角川文庫）
(3) 旺文社古語辞典
(4) 目加田さくを『枕草子論』（笠間書院）
(5) 三田村雅子「枕草子の虚構性」（『枕草子講座』第一巻　有精堂）
(6) 田中重太郎「精神の不滅――権門の没落の下に」（「国文学　解釈と鑑賞」昭52・11）
(7) 菊田茂男「『枕草子』の美意識(一)」（『枕草子講座』第一巻　有精堂）
(8) 増田繁夫「枕草子の日記的章段」（　〃　）
(9) 馬場あき子「ことさら露置かせて――自然観」（国文学　解釈と鑑賞」昭52・11）
(10) 萩谷朴『枕草子解環』（同朋舎）
『本朝文粋』巻十四所収「為ニ謙徳公一スル報恩ノ善ヲ願文、菅三品」……嗟呼、人命不レ定マラ。吾ガ生難ッレ知ソ。「彼ノ金谷ニ醉レ花ニ之地ハ、花ハ毎レ春匂ヘドモ而主ハ不レ帰ラ。南楼ニ翫ビレ月ヲ之人ハ月ハ与レ秋期スレドモ而身ハ何クニカ去ル。」況ンヤ寵深キ着ハ思ヒ又深ク榮甚ッキ者ハ畏レ又甚シキヲヤ。……
「　」で囲んだ部分は『和漢朗詠集』に収載。その前後は萩谷氏が、斉信が朗詠したかもしれない範囲とされる部分。
(11) 萩谷朴　「悲哀の文学――枕草子の一面」（「国語国文」昭40・10）
(12) (10)と同書
(13) 佐藤喜三郎「枕草子に於ける『をかし』『あはれ』について」（「平安文学研究」　昭31・12）

※底本は三巻本を用い、テキストには角川文庫の『新版枕草子』（石田穣二訳注）を使用した。（　）内はテキストによる章段数を表す。
また、本文引用部分の傍線などは筆者によるものである。